

## 弔い

### ～現代のやすらぎと慈しみ～

A2201617 長澤 みなみ

#### 研究の背景

自身の幼少期の記憶として、家族との墓参りを始め、身近な人の死に接することで、仏教や仏具、人を「弔う」という心理に強い関心を持った。短大入学後に漆を通し歴史を学ぶうち、縄文期から漆を用いた副葬品が発掘され、その後も寺社仏閣を中心に漆文化が発展してきたことを知り、現代の仏壇に至るまで仏教の世界において漆と「弔い」は密接な関係であると考えた。

#### 研究の目的

現代の「弔い」の意識についてデータの分析やアンケート等を活用しながら調査を進め、これからの世代を中心とした「弔い」と漆のかかわりについて、あらたな研究制作を通し提案する。

#### 研究のプロセス

- 若い人たちの「弔い」についてのアンケート調査
- インターネット調査(地域や宗派による仏具の違い、夾紵棺等)
- 成果物・デザイン決定

##### 【制作工程】

発泡スチロール原型制作

離型剤

布貼り

めすり

(布貼り→めすり 布を4枚～8枚)

かため

下地漆篋つけ

蒔地(二辺地→三辺地)

かため

離型

かため

蒔地

錆

水研ぎ

下塗り

中塗り

上塗り

装飾

仕上げ



▲原型制作のためのデザイン案



▲発泡スチロール原型



▲離型剤処理



▲布貼り後



▲断面調整(丸型)



▲断面調整(角型)

### 成果物(完成作品)

過去の「吊い」の形を文献等にて調査した際に夾紵棺の存在を知った。夾紵棺は長い年月を経ても形状を保っていることを知り、今回新たな制作の提案として、夾紵棺(乾漆棺)を用いたお骨入れを制作した。

#### 【夾紵棺について】

中国漢代より古墳時代後半ごろまでに使用されていた棺。

粗い布地を重ね、それらを漆で張り合わせて作られた棺のこと。

『夾』は重ねること、『紵』は麻布を意味しているためこのような名前が付いた。



### 考察

今回新たな「吊い」の形として、お骨入れについて研究制作した。当初、木で制作する方向も選択肢にあったが、木胎では早い時期に朽ちる可能性も高いという問題点もあり、様々なものを調べたところ夾紵棺にいきついた。デザイン実習で「精密乾漆」という技法を学び、今回授業よりも大きい作品を作ってみて、発泡スチロールの原型がその後の形にそのまま影響してしまうので精密に型を作らなくてはいけないこと、布貼りの作業では一枚一枚浮かないように細心の注意を払いながら貼り進めていくことなど、気をつけなくてはいけないことが多く、改めて乾漆技法の大変さ・難しさを肌で感じる事ができた。

アンケートの結果を参考に夾紵棺の形を決めることができたが、余裕をもって作業に取り掛かることが出来なかったのが反省点である。しかしながら、吊いの意味を求め、太古よりアジアの文化を形成してきた漆とのつながりを活かす提案となったことに、この研究の意義を感じる事が出来た。